



ステップスギャラリーはこれまでもコレクション展を幾度も開催している。公立の美術館においてコレクション展といえば単なる作品披露や企画展の合間の埋め合わせのように行われ、見る者もそれを承知でやむを得ず足を運ぶ場合が多々有る。研究的視線を注げば時代性や美術館の動向などの確認として喜ばしいことだが、そうでなければ一流の作品の展示を誇示する企画展に対して、安く買ったか寄贈されたB級品の寄せ集めにしか感じない。

ステップスギャラリーは都内というよりも日本で最強の現代美術の展覧会が成されている画廊であるといっても過言ではあるまい。何故なら毎週展覧会が行われ、現代美術の「いま、ここ」の思想が連続しているからである。そこで展示している作家に一流も二流もない。現代美術はそういった権威を排除しているからである。そしてオーナー吉岡の展示方法は、現代美術の本質を引き出している。

生きている作品を「いま、ここ」に連続する時間の中で、現代美術が最大限に生かされる空間に展示される。これは本来国が行うことである。しかしステップスギャラリーが

行っているのも、それでいい。そこから見る者は学び自己の人生の糧にすればいいし、美術館も倣えばいい。

更に吉岡はコレクション展において、個展では見つからない作品の側面を強調する。作品同士が呼応し、作品の新たな部分に光が当たり輝き始めるのだ。吉岡が今回セレクトした作品は2013年にステップスギャラリーで発表した金正喜、旧作と新作の木嶋正吾、未発表の津田亜紀子と、時間すらも超克している。ここから吉岡の瞳に蓄積された層を見出すことが可能となり、吉岡の瞳の層とは同時に現代美術の変遷も含意されている。

ギャラリー内の展示から考察しよう。津田の《立つ》は、金と木嶋の作品を「見ている」。何を見ているのか。自らの体に刻まれている入れ墨のような傷か、それとも表と裏がひっくり返された、その間に巡る襲か。三者の作品に共通するのは傷であろう。それを襲と解釈し、ギャラリーの裏に目を転じると、木嶋の新作にも傷が彫り込まれている。我々が作品を見るだけではなく、作品が我々を見ている。この相互関係に、現代美術は介在しているのだ。

